

世界を変える 8 人の企業家たちの思考と行動

経済・経営ジャーナリスト 桑原晃弥氏

サム・アルトマン(OpenAI 創業者)

彼は OpenAI の創業者で、AI 時代の幕を開けた人物です。日本にも何度か来日していて、ご存知の方もいらっしゃると思います。サム・アルトマンは先ほどのイーロン・マスクやこの後出てくるマイクロソフト(コンピュータ・ソフトウェア・メーカー)とも関わっていく人物です。

起業家育成プログラムにより投資家へ成長

サム・アルトマンは、1985 年にミズーリ州に生まれ、8 歳からコンピュータに触れ、中学の時にはウェブサイトをやって広告収入を得ています。そして高校時代には会社をやって、ソフト関連の仕事をしていました。このあたりの経歴は、マイクロソフト創業者のビル・ゲイツやデルコンピューターのマイケル・デル等とよく似ています。

サム・アルトマンは 2005 年にイーロン・マスクと同じスタンフォード大学に進学しましたがすぐに中退し、Loopt(ループ)という会社を創業しています。Loopt は携帯電話の GPS を利用して友人同士の位置情報やステータスを共有するサービスを提供していました。しかしこのビジネスは軌道に乗らず、2012 年に売却しています。このビジネスがうまくいかなかった理由は、友人同士の情報共有であればフェイスブックが登場しており、アプリであればスティーブ・ジョブズのアップルがアップルストアを使ってアプリ提供していました。世の中のそういった流れの中で Loopt は優位性を示すことができず、大きな成果を残せませんでした。

彼がその後大きく成長していった要因は、Loopt 創業ときに投資業を営む Y コンビネータという会社が主催する、起業家育成プログラムの第一期生になったことです。Y コンビネータはポール・グレアムという人が元々の創業者なのですが、サム・アルトマンは彼の起業家育成研修を3カ月にわたって受講しました。その研修のプログラムは、自分のアイデアを形にし、よいものであれば資金援助を受けることができるというものでした。

ちなみに、このプログラムから誕生した企業の中には、Dropbox(オンラインストレージサービス会社)や Airbnb(民泊紹介サービス会社)などがあります。こうした会社の創業者達は、Y コンビネータから支援を受けてビジネス化を成功しています。これがまさにアメリカにおける事業家です。個人がやっていることなのですが、起業家を沢山産み出す支えの 1 つになっています。

この Y コンビネータの特徴は、自分達が作り出す商品にこだわりを持ち、人々から支持されるものをちゃんと作ろうというところです。彼らがよく言うのは、「1 万人のお客を掴むよりも百人のファンを掴め」ということで、限られた数であっても本当にその商品を好きだという人を見つけよう、その人達の声を聞きながらいい商品を作っていこう、という考え方をしています。この Y コンビネータには大勢の希望者が集まります。希望者全員が入れる訳ではありませんが、入ることによって大きく成功する人々を生み出しています。

サム・アルトマンは 2011 年から Y コンビネータの非常勤パートナーになっています。非常勤パートナーは 5 名おり、起業を希望する人達に指導をしたりコンサルティングしたりする仕事です。その仕事をしながら、サム・アルトマンは興味の対象をこれまでの IT 中心から AI やバイオテクノロジーといった他の広い分野へ広げていきました。

サム・アルトマンの努力が実って自身が成長を果たし、彼は 2014 年に Y コンビネータの代表になりました。代表になった彼は、いろいろな人との人脈を深めていきます。そこで繋がっていくのが、先ほどのペイパル・マフィアと言われる人達、またあるいは、人工知能やバイオテクノロジーに詳しい人達です。

同時に、自分自身もそうした企業に投資をするということによって、2014 年にフォーブスでアメリカにおける 30 歳以下のトップ投資家に選ばれています。この時点で、サム・アルトマンは起業家というより、非常に注目される投資家へと成長していきます。

OpenAI で AI をオープン化

そうした縁が生きて、2015 年にサム・アルトマンはイーロン・マスクやピーター・ティールと共に OpenAI を設立します。皆様ご存じのように、OpenAI は後に Chat GPT を作る会社です。なぜ OpenAI が設立されたかという、当時の AI を巡る状況があります。当時 AI 開発においては Google がトップランナーで、Google 一社がほぼ独占するような力を持っていた訳です。このままでは AI の技術が Google に独占されてしまうのではないかと。皆が広く使えるものにはなっていないのではないかと。こういった危惧があり、Google に対抗するものを作らなければいけないということになって、ペイパル・マフィアであるイーロン・マスクやピーター・ティール、そこにサム・アルトマンが加わって、OpenAI 設立に至るのです。

OpenAI の創業当時は、サム・アルトマンよりもイーロン・マスクの方が前面に出ていました。この時、OpenAI という会社はコンピュータの OS における (WINDOWS ではなく) Linux のような、オープンで皆がお金をかけずに使えるもの、そういったオープンな AI を目指して開発しようとしていました。また、営利団体ではなく非営利団体でいこうとしていました。自分達が利益を得るというよりは、多くの人が使うことができる、多くの人の役に立つ AI を作ろうよということ。これが最初の OpenAI の理念だったのです。

非営利団体ということなので、普通の企業のように株式公開して大金を得るといったようなことはできないので、イーロン・マスクを中心とした出資者が拠出してくれるお金の頼るというのが OpenAI の最初のスタートです。当初、AI 開発はなかなかうまくいきませんでした。2017 年に Google の研究チームが AI に関する論文を発表して、それが 1 つのヒントになって大きな飛躍を遂げていきます。その後言語モデルの GPT を生み出したのが、この OpenAI です。

資金難の危機を乗り越え AI 開発を邁進

その後ようやく AI がなんとか使えるようなものになりつつあった時、2018 年、イーロン・マスクが OpenAI からの離脱を発表します。この要因は、イーロン・マスクの考え方の変化にあります。当初 OpenAI を非営利団体にしようと言っていたのにも関わらず、マスクは OpenAI をテスラの傘下にしようとしたのです。これは最初の理念と随分違っている訳ですが、それに対してサム・アルトマンが強く反発をしたので、イーロン・マスクが OpenAI を離脱することになったのです。ところが、この当時イーロン・マスクは OpenAI の資金をほとんど 1 人で支えていたので、データセンターやスーパーコンピュータ等々に莫大な資金が必要な

AI 開発は資金調達不能となり、資金難がサム・アルトマンに降りかかります。

サム・アルトマンが経験した最初の大変な危機でした。会社で働いている人達の給料も払えないというように非常に厳しい状況に追い込まれたのですが、この時にはイーロン・マスク以外のペイパル・マフィアの人達が資金提供してくれることによって、なんとか切り抜けることができました。

サム・アルトマンの優れているところは、ピンチの時でも決して開発の手を緩めようとしないうところ。これほどの危機に見舞われれば普通は開発がストップしたり、人を辞めさせたりすると思うのですが、資金を調達しながらなんとか乗り越えていった。ここが彼の凄さだと思います。

その後サム・アルトマンを救ってくれたのがマイクロソフトです。マイクロソフトの3代目のCEO サティア・ナデラとサム・アルトマンは以前からある程度知り合っていたのですが、当時マイクロソフトは強みがない企業になってしまっており、AI 開発においても Google に対して遅れを取っていたところにサム・アルトマンと出会い、OpenAI への出資を決意します。ただし、OpenAI そのものは非営利団体なので直接支援を受ける訳にはいかず、下部組織に営利企業の OpenAI LP(オープンエーアイ・エルピー)を設立します。

以後、AI が非常に身近なものになっていきました。この時にサム・アルトマンに二度目の危機が訪れます。OpenAI の上部組織が、営利を追求しすぎているということでサム・アルトマンを解任したのです。このままでは AI を一社が独占する、また、AI が危険なものになってしまうということで解任に至る訳ですが、サム・アルトマンは、マイクロソフトへ行って研究すると言い放ち、一緒に働いている研究者達も皆彼についていくことを主張したものですから、結局、サム・アルトマンは OpenAI に復帰することになりました。

今でこそ AI 開発は有望視されていますが、当時はまだ全く先が見えないものでした。そういうものに対して、OpenAI は資金を投じ続けました。危機に見舞われながらも、なんとか乗り切りました。

サム・アルトマンによりますと、まだまだ AI は勉強している段階だということです。しかし彼が言うには、かつてニュートンが万有引力の法則を発見したことを例に引き、AI が何か新しいものを発見できるようなものになって欲しいと語っています。サム・アルトマンはここからさらに AI の開発を推し進めていきます。